

## スウェーデンでの出産と子育て

### (6) 社会保障制度・父親と子育て・しつけ

海外出産・育児コンサルタント

Care the World 代表

ノーラ・コーリ

#### 【 社会保障制度 】

スウェーデンでは社会保障制度が充実しているといわれています。子育てをする親への家庭と仕事の両立を考えた制度ができています。子育てでは、子ども1人に対して16歳まで児童手当が毎月支給されます。子どもの人数分の手当が出ますので、子どもが多ければ多いほどその手当は増えます。

育児休暇は両親ともに最長490日(労働日)とれます。その間、給料の80%が支給されます。スウェーデンでは国際養子縁組も盛んです。この制度は韓国、アフリカ、旧ソビエト諸国などから迎え入れた毎年1万人にもおよぶ子ども達にも該当します。

基本的に子どもは医療費がかかりません。子どもの心身の問題に関しても気軽に相談できる体制が整っています。公立の保育園の保育料は収入と子どもの人数に応じて決められていて、政府の援助額は大きいです。学校は、小学校から大学に至るまで教育費は無料で、6歳から19歳までは給食費も必要ありません。

#### 【 子どもが病気になった時の対応 】

子どもが突然の発熱や怪我をした場合に、親は仕事の調整が必要になります。また、障がいや持病のある子どもがいる場合、どうしても親は仕事を抜けることが多くなります。日本では、障がいや持病のある子どもが生まれると、親は、特に母親は仕事をあきらめる選択を迫られる場合があります。スウェーデンではこのような場合にキャリアをあきらめないように支援しています。

8歳以下の子どもがいる親に対しては勤務時間の短縮を許可しています。行政のみならず、企業でも欠勤、遅刻、早退に対して柔軟性をもって対応しています。子どもの病気で数日休む場合も、後ろめたさや肩身の狭い思いは少なく、遠慮せずに申し出ができるのは、職場での相互理解もあり、協力体制が整っているからです。また、子どもはスウェーデンの将来を担うので、社会全体で育てるべきという強い意識が国民全体にあります。そこで、子育て中に子どもの病気などで休みをとっても安心して生活できるように多少の減額はあっても給料支払が保証されています。

さらに、12歳未満の子どものために仕事を休まなくてはならない場合、一時児童介護休暇が1人の子どもに対して1年間で120日まで取れます。そして12歳から15歳までの子どもの事情で休む場合には、医師から発行される受診についての書類を職場に提出すれば休暇が取れます。

子どもの病気や怪我が6カ月以上に及んだり、障がいのある子どもの場合、子どもが19歳になるまで追加手当も受給できます。

このように親は安心して子どもの介護やリハビリに励むことができます。病気がちな子どももいますし、なんらかの障がいのある子どももいます。子どもの状況によって生活ができなくなることはないように、健常児がいる家庭と同様に社会参加を維持できるように国は見守っています。

Photo by Nora Kohri  
父親に連れられていた子ども



### 【 父親の子育て参加 】

日本でも父親の子育て参加が唱えられてきていますが、社会全体が変わらないと、実現はそう容易ではないようです。スウェーデンでは社会体制を変えることによって、人々の価値観や考え方が少しずつ変わり、父親も母親と同様に子育てをする環境が整っていきました。

まず学校の家庭科の授業では男女ともにおむつの替え方を学んでいます。出産準備教室は夫婦で参加するのが原則で、父親だけの出産準備教室も設けています。出産に父親が立ち会うのは当たり前になっています。プレスクールの父母会にも母親、父親がほぼ同数が参加しています。

国の政策は男女問わず働ける者は仕事をし、国に税金を納め、国の将来を支えるために人口を増やすことです。時間と労力のかかる子育てという大事業をこなすには、父親の協力なくしては不可能です。そのため、父親も必ず子育てにかかわるように政府が呼びかけています。育児休暇は490日までは両親共に有給(給料の80%)で、その期間をどのように取るかは夫婦2人で相談して決めているようです。それでも父親は育児休暇をなかなか取ろうとしないので、最低でも2カ月は取らなくてはならないと定められました。

父親もとれる育児休暇も、周りの父親がそれに参加していれば自分も遠慮なく取れます。彼らは男女隔たり

なく、自分たちと同じ状況にある仲間を求め、育児休暇期間中は孤立しないようにしています。それでも父親なりの休暇中の過ごし方もあり、それは母親たちとは違うようです。今では父親を対象とした育児雑誌もあります。



photo by Nora Kohri

ドローンを操作する育児休暇中のパパたち

### 【 夫婦で子育て 】

スウェーデンでは両親が平等に子どもたちを育て、しつけています。国の制度は、両親が共に子どもを養育する責任と義務があるということを前提にできています。家事も、育児も夫婦で分担して当然という考え方で

す。そのため夫婦はお互いに育児休暇を半年ずつ取って、交代で子どもをみています。また両親共働きが前提のスウェーデン社会では子どもは早ければ生後6カ月から、平均すると1歳くらいから保育園に通い、そこで1日の大半を過ごすようになります。そして、保育園はほとんど待たずに入れます。

親に子どもを預けることはめったにありません。それは子どもの祖父母も仕事をもっている場合が多く、また彼らには彼らの生活があり、それを尊重しているからです。このように両親が中心となって子どもを育て、社会がそれを支えています。

### 【 少ない幼児虐待 】

アメリカや日本でも幼児虐待の問題があります。しかし、スウェーデンではまったくないとはいえませんが、それが大きな社会問題には発展していません。それはなによりも余裕をもって子育てができるからです。経済的ゆとりと精神的ゆとりがそれをもたらしています。

幼児虐待のケースを見ると、片親への大きな負担、社会からの孤立、周りのサポートの欠如、経済的ストレス、両親の不和、親として未熟、子育て知識に欠ける、などが原因のようです。スウェーデンではこれらを未然に防ぐ努力を国レベルで行っています。その中でも特に大きな割合を占めるのが教育です。スウェーデンでは国民に必要な最低限の経済的負担で高等教育を保障しています。必要な基礎教育をすべての国民に均等に機会を与えています。

幼児虐待の一例でもある体罰においても、「体罰は違法である」と予防教育が徹底されていて、周りの人もそれを指摘するので避けられてきています。社会全体で子どもを守っていこうという姿勢があります。また、周りの人たちが子どもへの関心を示し、見も知らぬ人が「かわいいね」というように頻りに声をかけてくれます。

子どもを育てることにかかるコストを国がかなりの部分を負担したり、子育て中の親を企業側でもサポートする体制は余裕を生み出し、ひいては子どもの心身への健康につながります。体罰をなくせば子ども達の間で起こるいじめも減少するというデータもありました。

夫婦仲に亀裂が生じた場合、無理に関係を続けることはないようです。子どものためにお互いに我慢するのはよくないとみなします。実際、両親の争いを目の当たりにすることは子どもへの精神的虐待だと受け止めているほどです。男女共に経済的に自立しているので、それぞれの道を歩むのも可能です。ただし、子どもへの責任は果たします。離婚後の親権は母親 50%、父親 50%で、月に 2 週間ずつそれぞれの親が子どもを見るというのが一般的なようです。

### 【 親の時間、子どもの時間 】

家族の基盤は夫婦仲がよいこととされています。そのためには夫婦だけの時間を大切にします。子どもたちは夜 8 時までには就寝します。眠れずにぐずっていても自分で眠れるように放っておきます。8 時以降は大人の時間ということ子どもたちも理解しています。このように自分だけの時間、夫婦だけの時間を設けることから余裕が生まれるのでしょう。

子どもたちも子どもらしく過ごせる時間を多く備えているような印象を受けました。スウェーデンでは遊びこそ学びの場という考えがあり、子どもらしく過ごせる時間を国が率先して確保しています。子どもたちは遊びを通して問題解決の仕方を学び、譲り合いを学び、人の意見を聞く大切さを学び、自分の意見を上手に相手に伝える技術などを学びます。人間として社会で生きていく基礎が大事にされています。それがアカデミックへの発展と信じています。

就学前であっても子どもたちは遊びを通して学びます。プレスクールではワークシート、宿題など早期教育のようなアカデミックなことはいっさいしません。本人が興味をもったらアカデミックとは違った角度からそれを教えます。たとえばアルファベットに興味をもったら、「A から始まるものはないか」というように近くにある玩具から探させたり、A をビーズで並べてみたり、A の音を真似してみたりします。そこに紙と鉛筆がなくても大いに学べます。

**【 しつけは基本のみ 】**

人間形成に重きを置くスウェーデンではしつけはそれほど厳しいという印象はありませんでした。それは子どもたちが自ら自由に与えられた友達との交わりの中から思いやりを学び、相手がどのように受け取るかといったことへの感性を伸ばしている結果なのでしょう。つまり子どもたちは自由奔放に育てられているように見えても、問題が起きたら自分で考えて、どうしたらよいのかをその場で決断する技術を養ってきています。そのため、「こうしろ、こうすべき」と言った押し付け的なしつけは必要ないということです。保育園で1日の大半を過ごす子ども達には親がいつもその場にはいないので、自分で自分の問題を解決しなくてはなりません。

自分でできることは自分で、そしてできない部分を親や保育者がカバーし、自立をうながすしつけです。子どもたちは自分をどのように危険から守ったらよいのかの教育も受けていますので、12歳以下の子どもでも徒歩、あるいは自転車で学校に1人で通っています。自宅に帰ってからも1人で留守番をしている子どももいて、街などではちょっとした買い物に1人で来ている子どもがいました。

基本的なしつけの中心にあるのは食事のマナーと年寄りに対する尊敬心ということでした。家族や親戚とのつながりを重視しているので、何かというと親戚中がよく集まります。そのような場でも食事のマナーや人への尊敬心を教えています。ただし、近年では長い時間保育園に預けていることに対する罪悪感を感じ、親の中には過保護が前面に出してしまう困った人もいます。

今回は子どもと長い冬の生活です。お楽しみに。